

7月25日の朝

私は、国東町小原にある家から国東高等女学校（以下「女学校」）に毎日歩いて通っていました。7月25日の朝も、私はいつものどおりみんなより早く着き、荷物を教室において、廊下に出て何気なく空を眺めながら、今日も校庭に植えている芋

の世話をするのかなと思っていました。

7時40分頃、眺めていた北の空にいきなり、低空飛行する敵機が現れました。パイロットの顔がわかるくらい近くになったとき、いきなり爆弾が投下されました。

じく廊下に出ていたのは知っていました。落ちた場所がたまたまお2人のいたところに近かっただけで、もしあの爆弾が少しずれて私の近くに落ちていたら、亡くなっていたのは私だったのではないかと思います。でも、私は、死ぬことは怖いと感じたことはありませんでした。それは、私だけに限ったことではないと思います。爆撃されても機銃掃射されても、次の日には通常どおり学校はあります。

す。それは、逃げる場所もなかったし、そういう時代だったとしか言いようはなかったのではないのでしょうか。戦争を知らない人は、今の平和をありがたいと感じるときがあるのかなと思うことがあります。



●重吉 ヨリ子さん (83歳・国東町小原)

私は、立ち尽くして目を閉じてからの記憶はありません。どうやって移動したのか、誰かに連れて行ってもなかったのか分かりませんが、気付いたら、校庭の端にあった防空壕の中になりました。次の日に爆弾の跡を見ると3mくらいの穴がありました。この爆撃で亡くなられた成原民子さんと渡辺民子さんも私と同じく廊下に出ていたのは知って



▲有志の方が慰霊のために作ったお地藏様



▲旧国東高等女学校校舎



「みんななかん」へ届いた

竹田津小学校校長の日記

私は、平成26年8月にみんななかん（国見生涯学習センター）へ届いた手紙を職員の方の知らせで目にするようになりました。その手紙の差出人は、戦前から戦後にかけて竹田津小学校の校長を務めた三重野友美さんの次女・戸倉郁子さんからでした。

昭和16年生まれの私も竹田津小学校に入ったとき、三重野校長にお世話になった記憶が鮮やかに蘇ってきました。手紙には、「父の遺品を整理している中で、昭和20年4月から終戦日の2、3日後のことまで記した日記が出てきたので何かの参考にしてほしい」と記されており、日記も同封されていました。

郷土史研究会の会長をしており、毎年発行している「国見物語」にぜひ掲載したいと思い、差出人の戸倉郁子さんとの交流を始めた。



三重野 友美 校長

戸倉さんからは、「前に出ることの嫌いな父だったので、自分の日記が本になることを驚いているだろうと思います。しかし、戦中派の私は、戦争を知らない世代に、こんな田舎でも恐怖の毎日があつたことを伝え、同時に平和がずっと続くことを願って承諾します」とお返事が来ました。

見送った自分は、教師としての職をやめなければならぬのではないかとさみしそうに話していた姿を昨日のこのように思い出します。と書いてありました。私も、教師の職に就いていた身として、教え子が戦地にいく姿を見送らなければならぬ状況に置かれたならばと想像するだけで、身が引き裂かれる思いになります。

三重野先生と戸倉さんの想いの籠った日記と手紙を、多くの方に読んでいただきたい。そして、次の世代に平和の尊さを伝える貴重な資料となることを願っています。



●国見町郷土史研究会会長 末綱 巖さん (73歳・国見町鬼籠)

日記には、毎日の空襲警報発令や解除が何時何分になされたのか、学校での出来事や終戦直後の自分の想いなどが綴られていました。

私、国見町郷土史研究会の会長をしており、毎年発行している「国見物語」にぜひ掲載したいと思い、差出人の戸倉郁子さんとの交流を始めた。

見送った自分は、教師としての職をやめなければならぬのではないかとさみしそうに話していた姿を昨日のこのように思い出します。と書いてありました。私も、教師の職に就いていた身として、教え子が戦地にいく姿を見送らなければならぬ状況に置かれたならばと想像するだけで、身が引き裂かれる思いになります。

